

## 調査報告

# ビジネス日本語講座修了生追跡調査 ～金沢大学におけるパイロットケースの実践報告～

深川 美帆・島 弘子・太田 亨<sup>※1</sup>

## 要 旨

金沢大学留学生センターにおいて2011年4月から2012年8月にかけて行ったビジネス日本語講座の第1期（パイロットケース）の受講生（以下、修了生）17名を対象に、ビジネス日本語講座を受講した修了生がどのような職場環境で働いているか、入社後ビジネス日本語講座で身につけたことがどのように役に立っているかをアンケートとインタビューにより実施し、それらの回答からパイロットケースのカリキュラムや授業内容を検証した。調査の結果、修了生が置かれている職場環境や業務内容の実態が明らかになり、そこで修了生がどのような点に困難を感じているかが明らかになった。これらの結果を今後のビジネス日本語講座のカリキュラムに反映させ、講座の内容をより充実したものにするつもりである。

【キーワード】 ビジネス日本語教育， 就職支援， グローバル人材， 追跡調査

## I はじめに

本稿は、金沢大学留学生センターにおけるビジネス日本語講座の第1期（パイロットケース）を受講した学生（以下、修了生）に、アンケート調査とインタビューを実施し、それらを分析・考察することによって、パイロットケースのカリキュラムや授業内容、そしてビジネス日本語講座の意義を検証するものである。本稿では、まず、ビジネス日本語講座パイロットケースの概要について説明し、次に修了生への追跡調査の方法、そして結果とその考察および今後の課題について述べる。

## II ビジネス日本語講座の概要

金沢大学のビジネス日本語講座は、2011年に留学生センターによって実施されている総合日本語プログラムの中の1コースとして開講した<sup>注2</sup>。この講座の目的は、金沢大学に在籍する外国人留学生で日本企業または海外の日系企業への就職を目指している学生への就職活動に必要な基礎知識と支援、就職後に必要な知識やスキルとそれを支える日本語力を育成することである。カリキュラムは1年半の8科目からなり、最初の1年間で、就職活動に役立つ知識とビジネス日本語を学び、次の半年間で入社後に役立つビジネス日本語と社会人として必要な知識を身につける内容となっている(表1)。講師は留学生センターの専任教員2名と非常勤講師6名、そして元アジア人財プロジェクト・オフィサー1名で担当した。また、これ以外にも、講義の内容によっては外部および学内の専門家や本学の修了生に講義を依頼した<sup>注3</sup>。

表1 ビジネス日本語講座(第1期)カリキュラムと出席状況

科目名	開講時期・曜日時限	主な内容	受講者数 <sup>注4</sup> 平均出席率 <sup>注5</sup>
ビジネス日本語Ⅰ	2011年前期 毎週木曜	日本の経済・企業文化について、就職活動の流れ、採用試験について	16名 (81.2%)
ビジネス日本語Ⅱ	2011年前期 毎週火曜	基礎ビジネス日本語(敬語、メールの書き方)	12名 (82.8%)
ビジネス日本語Ⅲ	2011年夏季集中、8月	キャリアデザイン、業界研究	10名 (77%)
ビジネス日本語Ⅳ	2011年後期 毎週木曜	面接対策(自己分析、エントリーシートの書き方、模擬面接)	14名 (81%)
ビジネス日本語Ⅴ	2011年後期 毎週火曜	上級ビジネス日本語1(ディスカッション、新聞読解)	11名 (58.9%)
ビジネス日本語Ⅵ	2012年前期 毎週木曜	企業での働き方、日本社会について	7名 (44.2%)
ビジネス日本語Ⅶ	2012年前期 毎週火曜	上級ビジネス日本語2(入社後に役立つビジネスマナー、待遇表現、ディスカッション)	10名 (42.9%)
ビジネス日本語Ⅷ	2012年夏季集中、8月	ビジネス企画と発表(プロジェクトワーク)	4名 (57.8%)

## III ビジネス日本語講座修了生追跡調査の概要

### 1. 調査の目的

本調査はビジネス日本語講座を受講した修了生が、実際に日本企業へ入社した後、この講座で身につけたことがどの程度役に立っているか、入社した後どのような知

識やスキルが必要だと考えているかを調べ、今後のビジネス日本語講座のカリキュラムに反映させ、講座の内容をより充実したものにすることを目的とするものである。

## 2. 調査の方法

本調査はアンケートとインタビューにより実施した。アンケートは2011年4月から2012年8月まで開講していた第1期ビジネス日本語講座のビジネス日本語Ⅰ～Ⅷまでのいずれかの科目を受講したことがある学生17名<sup>注6</sup>に、電子メールで質問項目を送付し、記名式で返信してもらった。それに加え、アンケート回答者のうち3名にアンケートの質問項目の内容をより詳しく聞くためにインタビューを行った。アンケートおよびインタビューは、2013年11月から2014年1月にかけて実施した。アンケートには17名中9名が回答した（回答率52.9%）。回答者の内訳は、文系大学院修了生2名、理系大学院修了生7名で、男子学生4名、女子学生5名であった<sup>注7</sup>。アンケートに回答した学生については表2のとおりである。

表2 ビジネス日本語講座（第1期）受講生 アンケート回答者の内訳

	専攻・最終学歴	性別	日本語学習歴 <sup>注8</sup>	就職先（業種）	ビジネス日本語受講歴
1	理系（電子）・博士修了	男子	5年	メーカー	I～V
2	文系（人文）・修士修了	女子	6年	小売業	IV, V, VI, VII
3	理系（電子）・修士修了	女子	12年	シンクタンク	I～VI
4	理系（電子）・修士修了	男子	4年	メーカー	I～Ⅷ
5	文系（法学）・修士修了	男子	9年	メーカー	I, II, IV, V
6	理系（電子）・修士修了	女子	10年	情報・通信業	I, II, III, IV, V VI, VIIはたまに出席
7	理系（機械）・修士修了	女子	2年6カ月	メーカー	IV, V, VI, VIIはたまに出席
8	理系（電子）・修士修了	女子	2年5カ月	メーカー	IVに聴講生として参加
9	理系（電子）・修士修了	男子	3年	技術系人材派遣業	I, II, III, IV, V VI, VIIはたまに出席

## IV 調査の結果と考察

アンケートでは、1) ビジネス日本語講座を受講した学生が入社後実際にどのような環境でどのような業務についているのか、2) 入社後、日本の企業をどのように捉えて

いるか、日本の企業で働く場合にどんな困難点があるか、3) 入社後、ビジネス日本語講座で学んだどのようなことが役立っているのかの3点について質問を行った<sup>註9</sup>。以下、アンケート結果をこの3つの観点から分析・考察する。

## 1. 修了生がおかれている職場環境と業務の実際

### 1) 就職先の会社の業界と規模

修了生9名の就職先の業界は、メーカー(5名)、情報・通信業(1名)、シンクタンク(1名)、小売業(1名)、人材派遣業(1名)であった。理系大学院修了生のうち4名は大学院のときの専攻に近い業界に就職しているが、ほとんどの修了生が入社後の実際の業務は大学院での専門分野そのものに直結していないと答えている。文系大学院修了生2名も大学院のときの専門とは特に関係のない業種に就職している。全員が社員数は700名~40000名<sup>註10</sup>規模のいわゆる大企業に就職した学生である。また、全員が自分以外にも社内に外国人社員がいると回答している。これらのことから、今回の回答者は主に日本の大手企業で外国人社員の登用もあり、グローバル展開をしている企業に就職した修了生といえる。

### 2) 入社前の教育と入社後半年間の業務内容

入社前に入社後に必要な知識や技術を身につけておくよう課題や指示が出されたと答えた学生は5名で、内容としては、1) コンピュータへの日本語入力を素早くできるようになっておくこと、2) 入社後の業務に関する知識や資格を身に付けておくこと、3) 英語力を測る試験を受けておくこと、4) 通信教育でビジネスマナーなどを勉強しておくこと、等であった。

入社からアンケート実施時点(入社後9ヶ月後)までの社内での業務については、8名が実際の業務につく前の研修を受けていたと回答していた。7、8月ぐらいまでが新人研修、秋頃から配属が決まり、そこでOJT<sup>註11</sup>を受けながら業務につくという学生がほとんどであった。

これらのことから、日本の企業は外国人社員であるということで特別な予備教育は特にしないこと、また入社前に求める事前教育の内容は社会人として仕事を始めるにあたり必要な基礎的な知識を確認しておくようなものであり、企業で必要となる知識や業務については、入社後に各社で時間をかけて教育している様子が窺えた。このことから、大学在学時においては、日本の社会についての基本的な知識と入社後の研修についていけるだけの語学力をつけておくことが大切であることがわかった。

### 3) 職場における人間関係

修了生を取り巻く環境のうち、特に人間関係に目を向けると、今回の回答者は全員

が前述のとおり社内に自分以外にも外国人社員がいる会社であった。そのうち、7名は同期に外国人社員がいるということだった。この質問に関して、インタビューにおいて外国人社員同士で交流はあるかとたずねたところ、そう頻繁に話したりするわけではないが、折に触れ食事をするなどして情報交換をすることがあるとのことだった。

次に職場で仕事に関する相談が気軽にできる相手がいるかという質問に対しては7名が「いる」と答え、その相手としては全員が「社内の同僚」と答え、さらにそのうち2名には「社内のメンター制度の相談相手」もいるという答えであった。メンター制度の相談相手を挙げていたのはいずれも大企業の中でも特に大手に就職した学生であった。

これらのことから、入社した修了生たちは、ほぼ全員が職場において情報交換をし、仕事に関して相談できる相手がいる環境にいることがわかった。

#### 4) 日本企業に対するイメージ

入社後と入社前で日本企業に対して抱いていたイメージに変化があったかどうかをたずねたところ、「大きく変わった」（1名）「少し変わった」（3名）、「ほとんど変わらない」（1名）、「変わらない」（4名）という結果だった。「大きく変わった」と答えた修了生については、入社後は想像以上にストレスが多く、業務においても想像以上に分からないことが多いと答えていた。「少し変わった」と答えた3名については具体的にどのような点が変わったかをたずねると、「入社前に思っていたより人間関係が冷たくなく、コミュニケーションが取りやすい」「入社前は雰囲気固いと思っていたが、会社としては各自の意見をきちんと話し出せる環境を作りたいため、入社してみたらフラットだった」「社内のグローバル化が進んでおり、話しやすく働きやすい」とのことだった。これらの回答をした中の2名にインタビューでさらにたずねたところ、入社前は、いわゆる上下関係、序列関係の厳格な堅い日本企業というイメージがあったが、実際にはそんなことはなかったと述べていた。今回このように答えた3名が所属しているのがいずれも大手企業で積極的にグローバル展開をしている企業であるという点も関係があると考えられる。

## 2. 入社後に困難に感じていること

入社から9ヶ月後の時点で、どのようなことを困難に感じているかをa) 仕事の面とb) 日本語の面の2点からたずねた。

### 1) 仕事の面での困難点

入社から9ヶ月の時点で、仕事の面で何を困難に感じているかは人によりさまざまであった。これは、人によって業務の内容がまだ研修の段階のものか、実際の業務に

ついているかによって異なっていることも関係していると思われる。「特にない」「分からないことが多く、まだ自信を持ってない」「分からないことがあったときに周りの先輩に聞くタイミングが難しい」といった回答をした修了生は、まだ研修中またはOJT中か、配属後まもなくで業務の内容を覚えている段階の修了生たちであった。一方で、「業務知識の勉強」「納期を守ること」「複数の課題をチームワークとして行う際のスケジューリング」「業務内容についてわからないことがまだ多い」(3名)のように、業務を実際に進めていくにあたっての困難を挙げる修了生もいた。業務にあたっての具体的な困難点が浮かび上がってくるのは、入社半年以降、つまり今後であろうと予想される。

また、修了生が日本人とともに仕事を進めていく上で、日本語での理解力や運用力が障害になっている例もあった。ある修了生は、日本語による業務上の指示を正確に理解するために、あえて日本語で聞き取った指示をメモし、それを指示した人や周囲で聞いていた同僚にその場で見てもらうことで、実際に業務に取り掛かる前に誤解や間違いがないかを確認してもらうよう工夫しているとのことであった。

## 2) 日本語の面での困難点

日本語面で修了生たちが挙げたこととしては、「言葉遣い」「敬語の使い方」「書類作成」「日本語での議論への参加」「電話応対」「メールの書き方」「議事録の書き方」や「メモを取る」などがあつた。これらのことから、業務全般にわたって、必要となる日本語で困難を感じていることが少なくないことがわかつた。「議事録の取り方」を取ることに難しさを感じている修了生にそれについて具体的にたずねたところ、会議において、発言者が文末まで言いきらなくても他の出席者が発言者の意図を理解して会議が進行していくような場合に、その項目について結局どのような決定が下されたか理解できず、どう言語化してまとめてよいか困惑するというものであつた。また、「メモを取る」ことが難しいという修了生は、日本人社員からの口頭での指示を正確に聞き取り理解して記録しておくことは業務上必須であること、また、メモをもとに将来会議での議事録を取らなければならないので、メモをしっかりと日本語で取ることの必要性を述べていた。

次に、日本語でのコミュニケーションにおいてどのような困難点があるかをたずねたところ、「自分の意見／意思を上手く伝えられない」(2名)、「(雑談の中に出てくるような)話題や言葉(略語や流行語など)がわからない」(2名)、「文化の差を感じる」(1名)、「きちんとした報告や連絡」(1名)といった回答があつた。「文化の差を感じる」と回答した修了生に対してインタビューで具体的にどのようなことをたずねたところ、日本人の客が商品についてのクレームを電話で伝えようとする際にク

レームの内容を明確に言語化して述べず、婉曲的な言い方を繰り返すだけであったため、その修了生はそれをついに理解することができなかったというものであった。

このような話から、修了生たちは場面や相手に合わせた適切な日本語表現に加え、在学中にすでに学んでいるはずの日本語の曖昧表現（含意）と、その背後にある日本文化に関し、仕事の現場では対応に最初戸惑い、苦慮している様子がうかがえた。これらのことは、日本語の授業のみならず、日本人との実際の接触場面を通して理解力と運用力が蓄積されていく面もあり、特に大学・大学院で勉強・研究中心の生活を送っていて日本人との接触場面が限られている留学生には入社後に戸惑いも一層大きいと考えられる。

### 3. ビジネス日本語講座パイロットケースの内容について

パイロットケースでは1年半で8科目を開講し、就職および入社後に働く上で必要な知識と日本語力の育成を図ったが、それらの内容が果たして実際に日本企業で働く上で役に立っているかどうかを知るために、「ビジネス日本語講座の内容で入社後に役に立ったと思うことは何か」「入社後にもっと勉強しておけばよかったと思うことは何か」「後輩への助言」の3つの質問に対する回答を考察する。

#### 1) ビジネス日本語講座で学んで入社後役に立ったこと

ビジネス日本語講座8科目の内容から、入社後に役に立ったと思うことは何かという質問に対して、最も多く上がったのが「敬語」で、7名の学生が答えていた。そのほか「メールの書き方」（3名）、ビジネスマナー・電話対応（4名）なども上がった。こうした回答から、入社後、修了生が日常的にまず直面する問題としては職場の周囲の人と日本語でコミュニケーションする際に適切な表現を用いることができる能力が大切であることがわかった。敬語使用のどのようなことが困難かをインタビューでたずねたところ、相手の身分や自分との関係に合わせて、どの程度丁寧に話すべきか、どの程度敬語を使って話せばいいのかといった点が難しいとのことであった。単なる敬語表現は知識として知っているがそれを実際に遭遇する場面でどのように運用するかといったところに入社後も困難を感じていることが窺える。ただし、入社後の敬語の必要度については会社や業務内容によって幅があるようである。敬語の使用について、インタビューでたずねたところ、小売業に従事する修了生は、敬語表現が正しく確実に理解・運用できることは必須であるが、理系技術研究職の修了生は入社2年目に入り、職場の直属の上司や同僚からは敬語の使用を求められなくなり、敬語を使わなくてもいい人間関係を構築しつつあるとのことであった。

なお、ビジネス日本語講座では、敬語やメールの書き方といった日本語表現の向上

を目的とした科目のほかに、「知的財産権について」「ワーク・ライフ・バランス」「職場におけるメンタルヘルス」「日本の経済」といった、入社後に日本企業で働く際に必要となる知識の習得を目的とした授業も行ったが、それらについては特に役立つ内容として回答に挙がってこなかった。これについては、敬語やメールの書き方は一学期に複数回授業があるが、他の科目は講座を通して1回のみでの授業のものがほとんどであることや、中には全員が必ずしも受講していない科目もあることから、修了生にとってあまり印象に残らなかったことも一因ではないかと考えられる。また、入社後半年過ぎの時点では本格的な業務について日が浅い修了生が多いため、先に挙げた「ワーク・ライフ・バランス」などといった実際の業務を重ねる中で考えるような事柄についてまだ必要性を感じていないことなども考えられる。しかしながら、「日本企業の文化についても講座でたくさん勉強したので、日本人の考え方に対する認識もできた。」という回答もあったことから、日本語面の学習だけではなく、日本の企業についての基礎的な知識や情報を学んでおくこともやはり必要であるといえよう。

また、ビジネス日本語講座を受講してよかったこととして、同じくビジネス日本語講座を受講した学生同士のつながりができたことを挙げる学生が複数いた（インタビュー3名、アンケート1名）。入社後も時折連絡を取り合い、お互いの仕事の状況や情報交換をしているとのことである。そうすることで、職場でのある理解しがたい出来事や事実が、自分の勤める会社特有のことなのか、それとも日本企業（あるいは一般的な企業全般）に共通することなのかなどが分かるので非常に助かるという。こうした修了生同士のネットワークは、入社後に留学生が日本企業に適応して働き続ける上で精神的にも大切な役目を果たしていると考えられる。

## 2) 入社後に必要性を感じているビジネス場面での知識および日本語

「入社後にもっとビジネス日本語講座で勉強しておけばよかったこと」の回答には、「敬語」「ビジネス場面での会話」「電話対応やメールの書き方」などコミュニケーション上必要な日本語力や、「議事録の取り方」「日本語でのメモの取り方」など、業務遂行にもかかわるスキルの必要性を挙げる修了生もいた。なお、入社後に日本語でのメールや書類作成に困難を感じる、もっと在学中に勉強しておくべきだと回答した修了生の中には、ビジネス日本語受講時点で日本語学習歴が浅く、授業での観察などを通して、日本語の運用力の不足が感じられた学生が少なくなかった。日本語の文法や基礎的な部分は、入社後に日本人と一緒に仕事をする中で自然に上手くなるというわけではなく、学習者は大学卒業・修了時の日本語力とそれほど変わらない状態で入社し業務についていると思われる。こうしたことを考えると、大学在学中にできるだけ日本語の基本文法の正確さを身につけておく必要があるように思われる。また、「日本経



済の用語」や「日本の年金制度」といった、パイロットケースではそれほど重点的に取り上げていなかったものについてももっと勉強しておくといよいものとして挙げられた。

### 3) ビジネス日本語講座後輩への助言

アンケートの最後にその他として後輩への助言を求めたところ、学生時代に研究をしっかりとっておくことの大切さや、社会人に求められる業務に対する姿勢（報・連・<sup>ほう れん</sup>相、時間配分、話をまとめる力）、日本語力向上、自分の専門分野の知識だけでなく、経済や社会についての話題やテレビで話題になっていることなど、幅広い知識が仕事をする上でも必要であることを挙げていた。これらのことは就職してみないと実感としてわからない面もあることだが、受講生に先輩からの助言としてこうしたことを伝えていくことで、ビジネス日本語講座の授業内容への興味喚起、動機付けにもつなげていくことが必要ではないかと思われる。

## V まとめと今後の課題

以上、アンケートおよびインタビューでの分析を通して、ビジネス日本語講座パイロットケースを受講した学生が実際に入社後にどのような環境で働き、どのような点で困難を感じているか、そしてビジネス日本語講座パイロットケースでの教育が実際にどのように役立っているかについて考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

### 1) 修了生の職場環境と業務の実態

今回、調査の回答を得た修了生9名についていえば、比較的大規模で、かつグローバル化を推進している企業という特徴があった。そうした環境からか、社内に自分以外の外国人社員がいること、社内に相談できる相手がいる環境であることがわかった。また業務については、日本企業では入社後半年過ぎまではかなり時間をかけて新入社員に研修を受けさせ、それぞれの会社における必要な知識やスキルの育成を行っていることもわかった。これらのことから、まず入社から1年以内において日本企業でやっていくために必要なこととは、社内の研修についていけるだけの基礎学力・知識はもちろんのこと、それらを日本語で理解する力、周囲の人間と日本語で円滑にコミュニケーションができるような日本語の力が必要であることがわかった。

### 2) 今後のビジネス日本語講座において必要なこと

上述のように、入社半年過ぎまでは研修を受けており、実際の業務に携わってまだ日が浅い学生が多かったため、職務上困難に感じていることは予想よりあまり多くなかったが、日本企業で求められる社会人としての基本的な姿勢やスキルを挙げる修了

生もいたことから、日本企業の特徴や、求められる力、姿勢、企業文化のような知識は、講座の各授業を通して重層的に伝えていく必要性を感じた。

日本語の面では、多くの修了生が周囲の人間とのコミュニケーションに必要な日本語力の運用に重要性を感じており、特に敬語表現について強く意識している様子が窺われた。これについては、パイロットコースでの1年目前期「ビジネス日本語Ⅱ」と2年目前期「ビジネス日本語Ⅶ」において授業で扱ったが、今後もより学習効果が得られるように工夫して提供していく必要があることがわかった。

以上、本稿では、ビジネス日本語講座のパイロットケースの修了生に、アンケート調査とインタビューを実施し、ビジネス日本語講座のカリキュラムや授業内容についての検証を行った。この結果をもとに、今後のビジネス日本語講座の充実を図っていくつもりである。なお、今回の調査の回答者はいずれも大都市の比較的大きな企業に就職した修了生からの回答が主であったが、今後、中小企業やより多様な業界に就職した修了生の実態についても調査する必要がある。また、今回は入社後9カ月の時点での調査結果であったが、今後は就業年数を重ねた段階で再び調査をし、修了生が日本企業に根付いていく過程と、真のグローバル人材として日本企業においてどのような役割を果たしているかを調査し、このビジネス日本語講座の意義を引き続き検証していきたい。

#### 【謝辞】

最後に、ビジネス日本語講座に協力して下さった学内および学外の講師の方々、およびビジネス日本語講座修了生の方々に心からの謝意を申し上げます。

#### 【注】

- 1 深川美帆（金沢大学国際機構留学生センター）、島弘子（元アジア人財プロジェクト・オフィサー、元金沢大学大学院自然科学研究科日中韓環境・エコプログラムプロジェクト・オフィサー）、太田亨（金沢大学国際機構留学生センター）
- 2 アジア人財資金構想プログラムからの自立化についての詳細は深川・太田・島（2012）を参照のこと。
- 3 ビジネス日本語講座第1期パイロットケースの詳細は深川・太田・島（2013）を参照のこと。
- 4 受講者数は、各科目に履修登録をした学生のうち、1回以上出席した学生の数を記した。
- 5 平均出席率は全受講生の出席率を平均したもの。
- 6 受講者のうち、2013年11月現在で本学に在籍中の学生（2名）と修了後に連絡がつかなかった学生（2名）を除外した数。
- 7 回答者のうちの1名（理系大学院修了生、男子学生）は、ビジネス日本語講座Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴまで受講し、2012年4月に大学院を修了した学生である。この修了生には、アンケートについては調査時点（入社から1年9カ月後）での回答を依頼した。また、回答者のうちの1名（いずれも理系大学院修了生、女子学生）は、ビジネス日本語講座に聴講生として参加していた学生である。

- 8 日本語学習歴は第1期終了時点での年月を記した。
- 9 アンケートの質問項目については本稿末の資料を参照のこと。
- 10 就職先企業単独での社員数をもとに記した。
- 11 OJT とは” On-the-Job Training” の略。

#### 【参考文献】

1. 深川美帆・島弘子・太田亨（2013）「金沢大学におけるビジネス日本語教育の実践報告～ビジネス日本語講座パイロットケース受講生への調査から～」『金沢大学留学生センター紀要』第16号, pp.81-90.
2. 深川美帆・島弘子・太田亨（2012）「金沢大学におけるビジネス日本語教育の実践報告～アジア人財プロジェクト自立化後のパイロットケース～」『金沢大学留学生センター紀要』第15号, pp.77-90.

#### 【資料】

##### 修了生追跡調査 アンケート

このアンケートは、金沢大学留学生センターのビジネス日本語講座を受講して、卒業・修了後に日本企業へ就職した方が、その後、どのように働いているか、どのように考えているかを知ることが目的とした調査です。調査の結果は、今後のビジネス日本語講座の教育内容をよりよいものにするための研究にのみ使用し、それ以外の目的には使いません。個人の情報の保護と回答内容の管理には十分注意いたします。また、調査の結果を研究成果として発表する際には個人名や企業名が特定されるような記載はしませんのでご安心ください。どうぞご協力をお願いいたします。

金沢大学留学生センター ビジネス日本語講座担当

深川 美帆、島 弘子

#### 【質問】 以下の質問に教えてください。

- Q1. あなたが就職した会社の名前を教えてください。
- Q2. あなたの会社の社員数を教えてください。
- Q3. あなたの会社の社員数のうち、外国人社員の数を教えてください。
- Q4. あなたと同じ年に入社した外国人社員の数を教えてください。よければ国籍も教えてください。
- Q5. 今年4月から現在（12月）までの会社でのあなたの配属先と業務内容（簡単に）教えてください。
- Q6. 入社前、会社から何か勉強して準備しておくように指示を受けましたか。受けた場合、どのようなことを勉強しておくように言われましたか。  
何か勉強するように指示を { 受けた・受けなかった }  
※（→「受けた」と答えた人へ）
  - Q6-1 何を勉強しておくように言われましたか（例：英会話力、敬語など）。
- Q7. 入社してから今までの間で、大変だったことは何ですか。
  - Q7-1 仕事内容の面において
  - Q7-2 日本語の面において
  - Q7-3 日本人社員とのコミュニケーションの面において
- Q8. 入社前にあなたが抱いていた日本企業、企業文化（雰囲気）のイメージは、入社後に変りましたか。
  - a, b, c, dからあてはまるものを1つ選んでください。
    - a. 大きく変わった
    - b. 少し変わった

c. ほとんど変わらない

d. 変わらない

※ (→ a, b, c と答えた人へ)

Q 8 - 1 どんなことが変わりましたか。

Q 9. 仕事に関して悩みがある場合、社内に気軽に話せて相談できる人がいますか。

気軽に話せて相談する人が {いる・いない}

※→ 「いる」と答えた人へ。

Q 9 - 1 それはどんな人ですか。a, b, c, d, e からあてはまるものをすべて選んでください。

a. ( ) 社内の上司

b. 社内の同僚

c. 社内のメンター制度の相談相手

d. 社内の友人

e. その他 ( )

Q10. ビジネス日本語講座で勉強したことで、入社後役に立ったと思うことが何かありますか。あれば書いてください。

Q11. 入社後、ビジネス日本語講座でもっと勉強しておいたほうがよかったと思うことが何かありますか。あれば書いてください。

Q12. 入社後から現在までで、何か困っている・悩んでいることが何かありますか。あれば書いてください。

Q13. その他 (後輩への助言、現在の抱負、私たちへの質問など)

ご協力をどうもありがとうございました。

## **Business Japanese Language Education at Kanazawa University : A follow up study of the 2011-12 students**

Miho Fukagawa, Hiroko Shima and Akira Ota

### **Abstract**

This paper reports on the first semester offering of the Japanese Business Language Education courses at Kanazawa University in the academic year 2011-2012. To verify and improve the content of the courses, a follow up study of the 17 students from the offering was conducted. The questionnaire and interview focused on the students' work environment in the Japanese companies for which they work and whether the course content was valuable in their profession. They have found that the course content was valuable for the professional career of the students and have also revealed some difficulties arising during their work experience. Reflecting the result of the study we will refine this course further for the following terms.